

経営財務会計

伏見 多美雄 著
日本規格協会 1981年
定価 2,200円

企業の経営者、管理者、技術者、計画、管理諸部門のスタッフが、企業会計の知識をもち、財務諸表を正しく読みこなす能力を身につけることは、しだいに重要性を増してきている。本書は、そのような人びとのニーズにこたえるために書かれたものである。会計や財務の専門家ではないノン・アカウンタントのために、企業会計の基礎的な知識を解説することを狙いとしている。なお、本書の副題は、
——企業会計の基礎知識——である。

まず本書の構成を示すと、つぎのようになっている。

- 1章 企業経営と会計情報
- 2章 会計的測定と基本的なしくみ
- 3章 複式簿記のメカニズム
- 4章 株式会社の財務諸表
- 5章 費用と収益の測定ルールと発生基準
- 6章 在庫品の評価と費用化のいろいろ
- 7章 固定資産と減価償却
- 8章 製造業の会計と原価計算
- 9章 製造原価会計の手続き
- 10章 財務会計と原価計算との結びつき

1章はいわば結論であるが、これにつづく9つの章は、これを3つのパートに分けてみると、わかりやすくなる。

第1のパートは、2章から4章までである。ここでは、企業会計、とくに財務会計の基本的なしくみを解説しているから、つぎのような基本的な問題が理解できるだろう。

- (1) 財務会計は、どのような約束ごとのうえで行われるのか。
- (2) 企業資本の調達と運用のプロセスを、会計的に処理する仕組みはどういうものか。
- (3) 営業成績を示す損益計算書の内容はどのようなものか。
- (4) 財政状態を示す貸借対照表とは、どのようなものかなど。

第2のパートは、5章から7章までである。ここでは、商業・サービス業によって、財務会計の手続きを、よりよく理解するための各論が展開されている。5章では、まず費用と収益のとらえ方である。ここでは、特殊な販売方式と会計処

理として、割賦販売、委託販売、工事進行基準などがでてくるが、わずらわしければ、これらは省略すればよいだろう。つぎに、手形取引の会計処理、引当金の考え方と会計処理などの説明がある。

6章は、在庫品の会計処理である。個別法、平均法、総平均法、先入先出法、後入先出法など、いろいろな在庫品の評価方法の説明である。よく真実の一つだなどというが、企業会計にはいくつもの真実がある。ということなどが理解できるだろう。

7章は、固定資産の減価償却である。その方法の主なものに、定額法と定率法があるということ。どちらを採用するかによって、企業利益は異なるということ、をはっきり理解することができよう。

この第2のパートでは、簡単な事例の仕訳による説明がよくでてくる。したがって、3章で、簿記のしくみ・仕訳のキマリを、しっかりと身につける必要がある。とはいっても一般の人には、それがわずらわしいというのが実感であるかもしれない。しかし学習しようとするからには、避けることなく取り組む必要があるだろう。だが、このへんに、ノン・アカウンタントのための本とはいっても、わかりやすくないという意見がでるかもしれない。

第3のパートは、8章から最後の10章までである。製造業に特有の会計処理である原価計算をとりあげている。製造業に関係ある人は当然のこととして、それ以外の人であっても、この程度は常識として理解しておきたい。まず、原価計算の基本的なステップである。(1)原価の要素別計算 (2)原価の部門別計算 (3)原価の製品別計算、の説明である。ついで、この仕組みを具体的に理解するために、小さなモデル企業を想定して、数値例を用いて計算の手順を説明している。しかし、ここでも仕訳がでてくるので、わずらわしければ省略するのもやむを得ない。

(紫野 直一)

財 務 管 理

西 澤 修 著
泉文堂 刊 1979年
定価 2,000円

石油ショック以来この10年間、よく財務の時代といわれている。また、決算書のことを財務諸表というのは、一般に知られている。このように、財務という用語はよく使われているが、それだけにまた、財務・財務管理の意味がよく理解されているとはいえない。本書は、財務管理とはどのようなものであるのか、その全体を概観するのに役立つと思われる。

本書は、中小企業診断士の「財務管理」の受験勉強用に書かれたものである。「財務管理」は、工鉱業部門・商業部門の両部門に共通の受験科目であるが、その出題範囲にそって構成されている。したがって、受験者が参考図書として読むにとどまるものではなく、財務管理の全体を理解しようとする者にとっても好適である。

本章の構成は、つぎのようになっている。

第Ⅰ部 総 論 第1章 財務管理総論

第Ⅱ部 経営分析 第2章財務諸表、第3章収益性分析、第4章生産性分析・流動性分析

第Ⅲ部 資本管理 第5章資本調達、第6章資本運用、第7章資本管理

第Ⅳ部 利益管理 第8章利益計画、第9章予算管理

第Ⅴ部 原価管理 第10章製造原価管理、第11章営業費管理

第Ⅵ部 資金管理 第12章現金資金管理、第13章運転資金管理

まず第Ⅰ部では、以下で詳述する財務管理の全般問題を解説している。企業の仕組みと資本の概念を明らかにして、資本の調達と運用が財務であり、その計画と統制が財務管理であるとする。そして、企業会計を大別すれば、財務会計と管理会計になる。資本の変動を計算するのは財務会計であるが、財務管理で主として活用するのは管理会計である、と論述する。

第Ⅱ部は、複式簿記の仕組みにはじまり、財務諸表の作成基準とその様式・用語についての解説がある。ついで、財務諸表の見方—つまり経営分析である。企業の財務活動の成果は、最終的には財務諸表に要約されるので、そのものの理解と見方が必要だからである。

第Ⅲ部は資本管理である。財務とは、資本の調達と運用のことであるから、どのように資本を調達し、どのように運用するかを述べている。しかし、両者は密

接不可分の関係にあるから、その管理方式に及んでいる。

第Ⅳ部は利益管理である。それは、資本の調達と運用は手段であって、目的は利益の実現にあるからである。まず利益計画を立てて、それを実現するのに、資本の調達と運用が必要である。しかし、利益計画を立てるだけでは不十分で、これを達成するには予算管理が必要であるから、この解説がある。

第Ⅴ部は、利益管理の一環としての原価管理である。原価管理では、原価だけを対象にして、その低減を図るだけでは不十分である。原価が低減できたとしても、そのために売上が減少して、利益が減少しては意味がないからである。ここでは、製造原価管理と営業費管理についてふれている。

最後の第Ⅵ部は資金管理である。まず現金資金をとりあげ、資金繰り表の作成と現金管理の方式についての解説がある。さらに、運転資金の管理に及んでいる。

以上が本書の概要である。理解を容易にするために、多くの図表が配置されているし、各章末の用語解説も親切である。しかし、財務管理総論という性格のものであるから、一読して容易に理解できるとはいえない。はじめは、理解できない個所があっても省略して、まず全体を概観することである。部分については、たとえば、経営分析・管理会計・原価計算などについては、それぞれの解説書を見て、また本書に戻るのがよい。なお、お急ぎの方は、各章のはじめにある「本章のねらい」を読むのもよい。（紫野 直一）

資 金 繰 り

染 谷 恭 次 郎 編
有 斐 閣 刊 1971年
定 価 1,500円

損益計算と資金繰りについては、「勘定合って銭足らず」という言い方で、ひろく知られている。しかし、この両者の関係は、よく理解されているとはいえない。そのために、利益は現金増加になっているのではないか、資金繰りが苦しいのは儲からないからだろう、という見方がでてくる。こうした疑問に答えて本書は、資金担当者だけでなく、経営者や他の部門で働く人たちをも対象として、資金繰りのポイントや手法を、わかりやすくまとめたものである。

収益性の観点からみれば、手持ち現金預金はゼロが理想の状態である。いかに多くの現金を持っていても、それだけでは1円の利益も生まないからである。しかし、資金繰りの観点からみれば、手持ち現金預金が多いほうがよい。将来どのような危険が発生するのか、正確に予測することはできないからである。

このように、多すぎるのは得策ではなく、少なすぎるのは危険である。過不足のないように保有金額を考慮しながら、資金調達と資金運用の釣合いをはかるのが、資金管理の課題である。

一般に、資金繰りなり資金管理といえは、経理・資金担当者にまかせておけばよい、という見方がある。しかし、これは間違いである。資金繰りを楽にするには、資金担当者の才覚によらなければならないところもあるが、その多くは、経営者をはじめ他の部門の人たちの協力によってである。

たとえば、利益があっても、代金回収は良くない、在庫品は増加する、資金計画を無視した設備投資の強行というのでは、資金のやりくりにも限界がある。企業で働く多くの人たちの理解と協力がなければ、資金繰りはうまくいかないわけである。本書はこのような観点から、企業の資金担当者、銀行の貸付係だけでなく、それ以外の人たちも対象としている。

本書の特徴の1つは、多彩な顔ぶれの執筆者によっていることである。大学教授、公認会計士、経営コンサルタント、金融機関・企業の資金担当者、銀行の経営相談所などである。そのために、理論に偏重しないで、きわめて具体的・実務的である。

特徴の2つは、Q（質問）& A（解答）方式をとっていることである。そして、です・ます体の記述で、1項目は2～3頁でまとめているから、読みやすくなっている。さらに必要な個所には、カコミの用語解説があり親切である。なお、本

書の構成を示すと、つぎのようになっている。

1. 資金繰りとは
2. 資金繰りの基礎となるもの
3. 収 入
4. 支 出
5. 資金繰り表の作成方法
6. 資金繰りをいかにうまく行うか
7. 資金繰りの診断
8. 資金のムダのはぶき方
9. 資金の調達
10. 発展途上にある企業の資金繰り
11. 年末資金の資金繰り
12. 社内金利制度——内部資金の管理

このような章立てになっているから、1章から順次ページを追って読むのがよい。1章では、1.資金繰りはなぜ大切か、2.資金という用語はどのような意味をもつか、3.黒字経営でも資金繰りにつまるのはなぜか、ではじまっている。全体を通読することによって、基礎的な知識と実務的な方法を知ることができる。

しかしまた、関心と必要によって、捨い読みするのもよいだろう。たとえば、3章では、20回収促進策にはどのような方法があるか、4章では、23支払予定を立てるさいにどのような点に注意するか、8章では、54支払利息はどのようにすれば節約できるか、などがある。したがって、事典としての利用法もあるだろう。いずれにしても、資金繰りに関心を持つ人にとって、読みやすく、実務に役立つ一書と思われる。（紫野 直一）

入門原価計算

松本雅男 著
税務経理協会 刊 1979年
定価 2,400円

原価計算といえば、会計担当者のみが知っていればよい専門技術と思いがちである。しかし現在は、企業に働く人々はすべて、原価計算の知識を、常識として知っていなければならなくなってきている。このような観点から、本書は、一般の初心者を対象として、すぐに実行できる新しい原価計算を、わかりやすく解説したものである。著者は、原価計算の権威として高名な松本雅男・一橋大学名誉教授である。

著者は、本書のねらいを“はしがき”で、つぎのように述べている。「多年にわたる第一線における教育指導の経験と、講習会などでの実務家の示唆を生かして、もっと初歩的な大衆むきの原価計算の入門書を書いてみたいと考えていました。しかし、実際にこの仕事に手をつけてみると、はじめに考えていたよりもむずかしいことがわかりました。

それは、過度に程度をおとすと世間にしばしばおられるような“常識本”となり、啓蒙的には役立つかもしれないが、実務には役立たず、さりとて、程度をすこし高めると素人にはわかりにくく、宿願に反するからです。こうして何回か書き改めてできたのがこの本です」という。

このような視点から、読みやすい“です・ます”体の記述になっている。そして、「この入門書を啓蒙的に利用したい方々は、こまかい計算例題をとばして、勘定連絡図で各種の原価計算を大観した上で、さまざまな原価計算の用途に重点をおいて読んでいただきたい、と思います。そしてさらに一步を進めて、この入門書を実務に生かそうとする方々は、例示を入念にたどりながら研究することをおすすめします」として、学習の要領も示されている。

本書の構成は、つぎのようになっている。

- 第1章 総説
- 第2章 実際全部原価計算
- 第3章 実際全部原価計算—総合原価計算—
- 第4章 標準全部原価計算
- 第5章 標準直接原価計算
- 第6章 営業費計算
- 第7章 制度外原価計算

第8章 原価情報の伝達

ところで、原価計算を学習しようとする人は、著者の指導要領にしたがうのがよい。しかし、そこまでは必要ないという人は、まず第1章と各章のはじめの1ページを読めばよいだろう。

第1章で著者は、「原価計算を学ぶには、原価計算で使われている用語の意味を知っておく必要があります。それは、この世界で使われている共通の符号だからです。しかし初心者は、ここを簡単に読んで、必要なときに関係箇所を読みなおすのも一つのやり方です」といわれる。ここで、いろいろな原価用語の意味、原価計算の分類などを知り、おぼろげながらであっても、原価計算とは何かを理解することができよう。

また、各章の1ページは、つぎのような解説で始まっている。たとえば、第2章では、「実際全部原価計算とは、製造原価の実際発生額全部を製品原価とし、これを棚卸品と売上品へ配分して、棚卸資産原価と売上原価を計算し、つぎに売上原価と販売費および一般管理費を売上高に対応させて、営業利益を計算する原価計算制度です」となる。

また第3章では、「製品を連続して生産する工場、または部門で行われる原価計算であって、1原価計算期間（通常1カ月）における総製造費用を、その期間における総生産量に分割することによって、製品原価を計算する原価計算を総じて総合原価計算といいます」となっている。

このように、いろいろな読み方があるのにしても、指導経験の豊富な著名な学者が、初心者を対象に書かれたものであるし、原価計算を学ぼうとする人に、好適な書であることは間違いない。また、それなりの人が、知識を整理するための一書ともいえよう。（紫野 直一）

経営分析のノウハウ

紫野直一著
経営実務出版刊 1980年
定価 1,200円

企業の決算書には、営業成績や財政状態が示されている。企業の実態をつかむには、計数化しにくい質的要因も無視できないから、決算書さえ見ればよい、というものではない。しかし、その実態を知るには、決算書の分析は欠くことができない。本書は、その方法について100項目をとりあげ、すべて見開きで、1項目は完了という形になっている。左ページは説明で、右ページは図・表・要点の抜きがきで、理解しやすいように構成している。

経営分析は、財務分析や財務諸表分析ともいわれるように、主として損益計算書や貸借対照表などの決算書を資料として、企業の営業成績や財政状態を明かにすることである。これによって、経営上の長所や短所をつかんだり、これを手掛かりに改善対策を講じることができる。

一人前のビジネスマンといわれるには、いろいろな専門知識だけでなく、自社の状況をよく知っておく必要がある。また、日常の仕事を円滑にすすめるには、取引先の経営状態を知らなければならない。そのためには、経営分析が必要である。

「習うより慣れろ」といわれるように、経営分析にも、ある程度の慣れが必要である。本を読むだけでは、なかなか身につかないもので、読む→実際にやる→聞く→読むの繰返しが求められる。しかし、読むにしても読みやすいほうが、慣れるにしても慣れやすいほうが、良いことはいうまでもない。

一般に、話を聞けば簡単なことであっても、活字にするとむずかしく感じるものである。それに“読む”というのは、ある種の苦痛をともなうし、できるだけ“見る”にかえたほうがよい。活字だけよりは、図なり表なりによって視覚化すれば、はるかにわかりやすくなる。しかし、見るだけでは、理解するのに不十分である。本書は、見開きで1項目完了という形によって、読むと見るの相乗作用によって、理解の促進をねらっている。

ところで、本書の構成は次のようになっている。

1. 決算書によって経営状態を見る
2. 貸借対照表を見る
3. 損益計算書を見る
4. 決算書を関連づけて見る

5. 損益分岐点を見る

6. 生産性を見る

1章は概論であるが、ここでは数字の良否を判断する指標、決算書ができるまでの過程。つまり簿記の概要、決算書の作成基準などをとりあげている。

2章は、代表的な決算書である貸借対照表の様式と、その見方の説明である。これは、損益計算書にくらべて、わかりにくいと思われている。しかし、要するに縦と横の関係をみるということであり、その状態を示す指標には、どのようなものがあるかを知ればよい。ということを解説している。

3章は、損益計算書の様式とその見方の解説である。これによって、利益にもいろいろな利益があるということ、要するに最後の利益はいくらかという見方では、判断を誤るのだということが理解できる。4章は、貸借対照表と損益計算書を、別々にみるだけでなく関連づけて、各種の資本利益率や回転率をとりあげている。

5章は、損益分岐点の分析である。これは、以前から経営常識とされていたが、最近また実務で重視しているものである。実績を検討するさいに、また計画を立てるさいに、どのように役立つかが理解できるはずである。

最後の6章は、生産性の分析である。生産性向上は、それぞれの企業にとって重要な課題であるが、日常用語としてもよく用いられている。そのためにまた、その意味が正しく理解されているとはいえない。ここでは、企業の実績はどのように測るのか、生産性と人件費や利益との関係、計画設定における適用などについて説明している。（紫野 直一）